

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



実寸大  
エサ付け  
&  
オモリ  
解説付き

# へらエサ パワーブック

HERA BAIT POWER BOOK  
2012

なつあきごう  
夏秋号

## Contents

- 02 両ダンゴの浅ダナ釣り
- 06 両ダンゴのチョーテン釣り
- 10 両ダンゴの底釣り
- 14 「ヒゲトロ」セット釣り
- 20 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 24 ウドンセットのチョーテン釣り
- 28 ペレットエサの宙釣り
- 32 「一発」セットのチョーテン釣り



# 両ダンゴの浅ダナ釣り

## 釣り方の基本とコツ

両ダンゴの浅ダナ釣りは、

まずリズム良くエサを打ち込み、どの位置で食いアタリがでるかを見極めます。なぜリズム良く打ち込むかと言うと、浅ダナの釣りは、エサがタナに入ったときに食い頃になるようエサは小さめとなり、奇せる量に限りがあるからです。ですから、小エサをテンポ良く打っていき、なるべく早いアタリで釣っていくのが基本的な考えとなります。

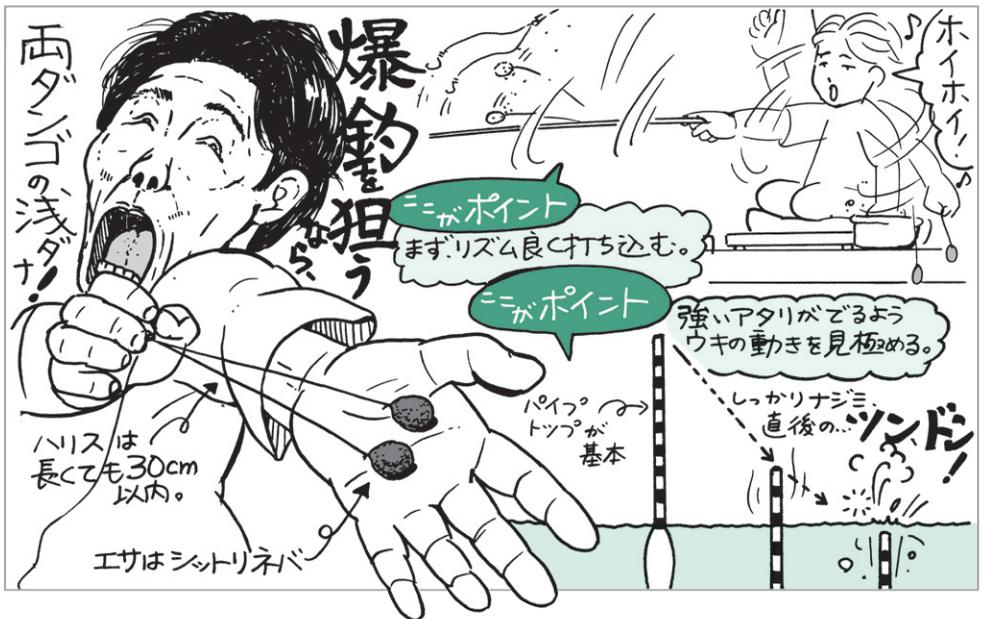
また、水面直下から強くバラけてしまうようなエサでは、ウワズリがきつくなるので、エサ付けや大きさにも注意が必要です。このことから、ここで紹介するエサは「ややしっとり系のネバ」になっています。ある程度の水深でエサが膨らみ始め、タナに入った直後にはちょうど良いサイズになり、早いアタリがで

るのです。

もし、待つて釣るような場合であるならば、盛期でもバラケにヒゲト口のようなセットの釣りのほうが効果的です。しかし、50kgを超えするような爆発的な釣果をだせるのはこの両ダンゴの浅ダナ釣りなので、テンポ良くエサを打ち込み、強いアタリがでるようにウキの動きを見極めましょう。

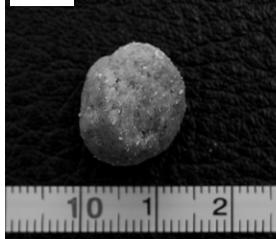
その肝心なウキの動きですが、トップのどの位置で強い食いアタリがでているのかをチエックします。基本はパイプトップのウキでしっかりなじみが入り、その直後の強いアタリです。この場合、魚は必然的に釣るタナに溜まりアタリ返しも多くありません。

また、ときには魚がタナに溜まりにくい状況もありますが、そういう場合には、



## ●エサの大きさ

実寸大



PCムクトップのウキを使用してトップのストロークをいかし、なじみ途中の「カチ」「ツン」といったアタリに絞るほうが良いときもあります。

なじみ込みの早いアタリのため、タナに魚を寄せてというイメージではありませんが、エサが動いている落下中だけに反応するケースもありますので、「こういつた釣り方も有効です。このような場合は、エサを自然落下下に近づけるために繊細なタックルも必要になります。その日の状況によって、食

いアタリも変化しますので、その見極めを早くして、この2パターンの組み立てをすると無理なく釣ることができま

ます。

ハリスの長さは長くても30cm以内にとどめ、エサをもたせるためにも詰めていくというのが、理想的な状況です。逆に30cmで動きが悪いようなときは、両タンゴの場合ではないと判断しましょう。

高活性時には、へら鮎の寄りだけでウキがナジむという現象が良く起こります。これをエサが持っていると感じてしまいますと、カラツンやスレが目立ってきます

し、次第にアタリも減ってしまいます。そういう場合はエサをしっかりと練って持たせることが肝心。思っている以上に、エサが持つてないことは良くあることです。

## セッティングの注意点

浅ダナの釣りなので、ある程度の繊細さは必要だが、盛期であることからそれほど神経質になる必要はない。竿の長さは、基本は規定最短尺が良いが、並びとの兼ね合いや型の揃い方などで10尺ぐらまでは視野に入れておく。ウキは、しっかりなじませてタナで釣り込む場合はパイプトップ、ナジミ途中のアタリをねらう場合はPCムクトップと使い分けるとよいだろう。

## ■セッティング

竿●8～10尺

ミチイト●0.7～0.8号

ウキ●羽根寸5～6cm

パイプトップ

またはPCムクトップ



ハリス●0.4号上15～20cm  
下20～30cm

ハリ●上下4～5号

## ●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ  
17mm×18mm



# “パウダーベイトヘラ”をベースに！ 3つのパターンで釣り切れる！！

## パウダーベイトヘラ 300cc＋ 浅ダナー本 200cc＋水 100cc



### ●作り方

「パウダーベイトヘラ」と「浅ダナー本」をボウルに取り、水を注いでむらにならないよう30回ほどよくかき混ぜる。エアーを抜くように軽く押し練りを加えてから使う。

### ●特徴

ブレンドの特徴は、軽くて持つこと。単品でも使える「パウダーベイトヘラ」は重さ・ネバリ・開き具合などのバランスが良い中間的なエサ。これに「浅ダナー本」をブレンドして軽くさせるとともにタナでの膨らみを補強している。

### ●使い方のコツ

仕上がりは少し硬めなので、ウキが動き始めて食いアタリがカラツンになるようなら、手水と押し練りで調整していく。エサを持たせる場合も同じ調整だが、それに対応できない場合は、左頁のブレンド調整を行なう。食い頃のエサをタナへ入れたいので、エサの大きさと持たせることはしないようにしたい。

# 両ダンゴの浅ダナ釣り

## ブレンドの考え方

### 基本ブレンド



パウダーベイトヘラ  
重さ・ネバリ・開き具  
合のバランスが良い中  
間的なエサなのでブレ  
ンドのベースに最適。



浅ダナー本  
ブレンドすることで軽  
い仕上がりとなる。ま  
た、タナで膨らむよう  
にバラけるので、アピ  
ール力もアップする。

### ブレンド調整①

よりエサを持たせたいときは、「カッテン」をブレンド

パウダーベイトヘラ 300cc + カッテン 200cc + 水 100cc



### ブレンド調整②

しっかりなじませてタナで開かせたいときは、「天々」と「スーパーダンゴ」をブレンド

パウダーベイトヘラ 200cc + 天々 200cc +  
スーパーダンゴ 100cc + 水 100cc



# 両ダンゴのチョーチン釣り

## 釣り方の基本とコツ

この釣りは、エサへの反応が良い時期に、魚をたくさん寄せてたくさん釣ろうという欲張りな釣りです。また、振り込みやすいことからエサ打ち点が安定するので、よりへら鮎を集めやすくもありません。ですが、ここに大きな落とし穴があり、寄りが多いと釣りづらくなる面もあります。

よくあるパターンが、ウキが立たないと、ウキがナジまないの2つです。ですが、この2つは、原因がそれぞれ違いますので、きちんと分けて考えることです。

まず、ウキが立たない。ですが、これは、エサ打ちを繰り返して魚が寄ってくる、ウキが立たなくなったり、あるいはウキが立つまでに時間がかかり長くなるというパターンです。ウキが立たないのは、ウキ下からオモリ

までのミチイトがしつかり張らないから。つまり、オモリ量が足りていないと判断します。盛期では、こんなに大きいのか？と思うようなウキが正解のこともありますし、大きすぎて失敗することのほうが少ないと考えて良いでしょう。決してウキが立たないことを、エサが持つていないから、ハリスが長いからと考えないようにしましょう。

次に、ウキがナジまない。場合ですが、これはエサが持つていないと判断します。両ダンゴを打っているのに、ウキがナジまない、1〜2目盛りの浅ナジミということはあるえまませんので、エサを大きく付ける、練る、重くする、あるいはハリスを詰めるといった対応が求められます。こちらは、ウキがしつかり立ってからの話ですの

ウキが立たない、ナジまない……。  
原因は別……。



で、ウキの大きさは合っていると考えましょう。

これが、この釣りの大前提です。ウキが立たないのは、ウキを換えれば済みませんが、ウキがナジまないは、エサと仕掛けで対応しなければなりません。特にエサはブレンドだけ気にしてもダメです。両ダンゴの場合、まずはエサを練ることです。持たないと思ったら、とことん練ってみてください。それから大きく付けてみてください。それでいい。それでも持たなければ、

ハリスを詰め、そのあとハリを大きくします。エサの持ち具合は、3回ほどアタってもエサが持つぐらいを目安にします。つまり、アタリ返しがでるようなエサこそが、釣れるエサと言えるのです。そして、エサ合わせとセツティング調整を丁寧に繰り返すことで、正解に近づけていくのがこの釣りの基本でもあります。醒醐味でもあります。また、チョーチン釣りでは、竿の長さ⇨ならうタナも重要です。釣り込んでいくうち



に、黄色味がかった型の良いへらが釣れてくれば、ねらいは合っていると考えましょう。ですが、黒っぽいへらが多く混じるようなときは、タナが合っていない(比較的浅いタナのへらが食っている)と考えられますので、次第に釣りがむずかしくなったり、壊れやすい傾向にあります。そんなときは、竿を長くして深いタナにねらいを変えてみます。竿を長くするときは、2尺単位で換えるのがお勧めです。これは、今までねらっていたタナの範囲外を明確にねらうため、ハリスの長さ

①が一番よ  
いときは竿を1尺短  
く、③がよいときは  
1尺長くするとより  
釣りやすくなる可能  
性が高いと言えるで  
しょう。

を考慮して2尺分深くする  
という考えです。  
アタリの出方を大別する  
と次の3パターンです。  
①ゆっくりナジミながら受  
けや止めがあつてのナジミ  
途中のアタリ  
②ナジミ切ったところ(ハリ  
スが張った)でのアタリ  
③深くナジんでワントテンポ  
おいてからのアタリ  
基本的には一方通行の釣  
りですので、③のタイミング  
でアタらなければ打ち返し  
ていきます。そして、①  
③のなかで一番ヒット率が高  
いもの、型が揃うものを  
探って行きます。ち

## セッティングの注意点

管理釣り場や魚影の多い釣り場では、それほど長い竿をだす必要はなく、長くても13尺まであれば充分である。一番のポイントは、魚の寄りに負けないオモリ負荷を持つウキを選ぶこと。たとえ、8尺であっても3g以上の負荷が必要ときもある。水深で選ぶのではなく、しっかりウキが立つかを判断基準としたい。ラインはトラブルがでにくい号数、ハリはエサをしっかり持たせられる号数を選べば問題ない。

### ●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 17mm × 27mm ~ 「絡み止めスイッチシンカー」2.0g + 0.25mm厚板オモリ 17mm × 33mm

+

0.25mm厚板オモリ  
17mm × 27mm

+

0.25mm厚板オモリ  
17mm × 33mm

### ■セッティング

竿●8~13尺  
ミチイト●1.0~1.2号  
ウキ●羽根寸10~13cm  
パイプトップ  
またはPCムクトップ

ハリス●0.4~0.6号  
上50~60cm、下60~80cm

ハリ●上下6~8号

# タナで膨らむ“グルバラ”をベース 配合比率で調整できる明快ブレンド

グルバラ 200 cc + 水 200 cc  
ガッテン 200 cc +  
バラケマツハ 400 cc



## ●作り方

「グルバラ」をボウルに取ったらそこへ水を注いでドロドロにする。そこへ「ガッテン」と「バラケマツハ」を加えて30～40回かき混ぜる。水が行き渡ったら軽く押し練りを加えてアアーを抜いてから使い始める。

## ●特徴

重さがあるってタナで膨らむ「グルバラ」、エサ持ちを良くする「ガッテン」、バラケ性のある「バラケマツハ」を使うことでバランスのとれたブレンド。基本ブレンドは寄せを重視したもので、各エサの比率を変えるだけで状況に合わせてエサ合わせができる（ブレンド調整参照）。

## ●使い方のコツ

エサ持ちが悪いときは、ボウルにこするように10回ほど練りを加え、それを繰り返していく。それでも対処できなければ「ガッテン」の比率を多くする。重さが欲しいときは「グルバラ」の比率を多くしていくが、それでもエサ持ちが安定しないときは、「ダンゴの底釣り夏」で重さとまとまりを補強する。

# 両ダンゴのチョーチン釣り

## ブレンドの考え方



### 基本ブレンド

#### グルバラ

麩とグルテンを絶妙な比率で配合したダンゴ用エサ。重さがありタナで膨らむので、両ダンゴのチョーチン釣りのベースエサとしては最適。高活性時は比率を多くしていくと良い。



#### ガッテン

魚にもまれても、タナまでしっかり持つうえ、エサのまとまりがよく、芯がしっかりと残るので、エサ持ち重視の場合は、比率を多くして使うと良い。



#### バラケマツハ

適度な重さがあるので、バラケ性はあってもウズリにくい。ブレンドの中では寄せ効果を担い、寄せを意識するときは多めにブレンドする。

### ブレンド調整

基本ブレンドの3つのエサの比率を変えるだけで簡単に調整ができる。

#### 打ち始め寄せ重視

グルバラ 200 cc+水 200 cc+ガッテン 200 cc+バラケマツハ 400 cc



#### 持たせるなら

グルバラ 200 cc+水 200 cc+ガッテン 400 cc+バラケマツハ 200 cc



#### 重さをつけるなら

グルバラ 400 cc+水 200 cc+ガッテン 200 cc+バラケマツハ 200 cc

# 両ダンゴの底釣り

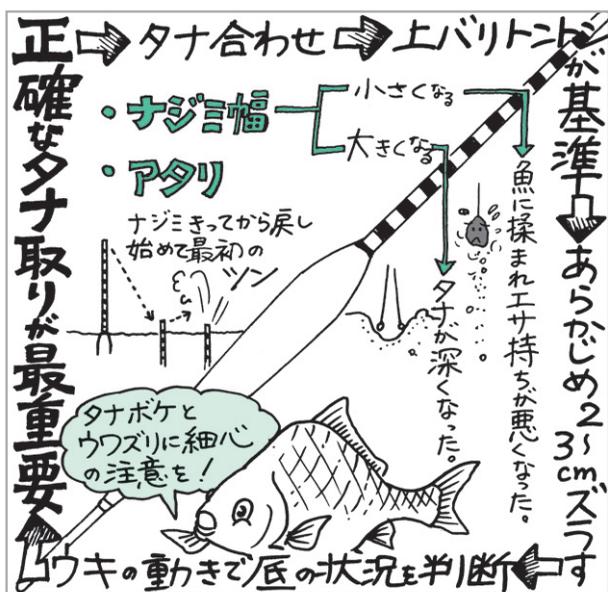
## 釣り方の基本とコツ

両ダンゴの底釣りが他の釣り方と異なるところは、上下ふたつのエサを底に着けて釣るといふ点です。それは単にエサが底に着いていれば良いというものではなく、へら鮒がエサを食いやすい状態にさせることが重要です。そのためには何よりも正確なタナ取りが必要不可欠。次いでタナ取りで計測した水深を基準としたタナ合わせが、釣果を決定する大切なポイントとなります。スタート時点のタナは上バリが丁度底に着く状態。いわゆる上バリトントンと言われるタナが基準となりますが、タナ合わせの過程で十中八九はズラす(タナを深くする)方向に進むため、あらかじめ2〜3cmズラシで始めることが多いようです。

ウキの動きからすべて判断して調整を行いません。たとえば、ナジミ幅が小さくなったときはエサがへら鮒に揉まれて持ちが悪くなった(エサの開きが早まった)と判断できますし、ナジミ幅が大きくなったときはタナが深くなった(底のヘドロが掘れたり、水位の上昇やラインの縮みが主な原因)と判断できます。こうした変化が起きると、順調に釣れていた釣況から突然釣れなくなることがあります。こうならないためには小さな変化を見落とすこととなく、早めにタナを修正することが大切です。

変化を察知する際に最も頼りになるのが基準となるナジミ幅。上バリトントン、もしくは2〜3cmズラした状態で、両バリ共に基準サイズのエサを付けて振り込んだときに何目盛りナジむの

かが基準となりますが、これはへら鮒がまだ寄っていないうちに確認しておくことが肝心です。使うエサのサイズや重さによっても異なりますが、へら鮒が寄っていない状態で概ね4目盛り前後、アタリが続いてコンスタントに釣れているときで2〜3目盛りとなるのが一般的なものです。これ以上またはこれ以下の場合にはタナが変化した場合と判断すべきでしょう。またタナは徐々に変化する場合と、短時間に一気に変化することがあるので、常にナジミ幅の変化には注意する必要があります。



## ●エサの大きさ

実寸大



アタリはナジミきったウキが返し始めて最初の明確なアタリをねらうのが基本です。ウキが返すタイミングはへら鮎の寄り具合によって左右されます。ナジミきったと同時に大きく返すこともあれば、数十秒経ってから徐々に返すこともあります。このとき、ねらったアタリで空振りが続くようであれば、さらに後のアタリにねらいを絞ります。それでもヒットしない場合はエサをひとまわり小さくして、早いタイミングで食い頃の大きさになるように調整します。それで

もヒット率が向上しないと、きはエサを軟らかくします。そしてエサの調整でも改善できないときはタナを1〜2cmズラし、よりエサを底に安定させます。こつした手順を繰り返しながら、あくまで早いタイミングのアタリでヒットするよう調整するのが底釣りの基本です。釣り込むためのポイントには、タナボケとウワズリに細心の注意を払うことです。いずれもアタリの有無に直結する不具合なので、常にウキのナジミ際の動きとナジミ幅、さらに戻す速さに注意しながら、ヒット率の良いタイミングのアタリ的にを絞りましょう。また、安定的に釣り込むためには不確定な早アワセは避けたほうが無難でしょう。

## セッティングの注意点

竿の長さは、水深に合わせて竿一杯で底が取れる長さを選択するのが基本だが、状況によっては規定最短尺や最長尺を選択するのもひとつの手だ。ミチイトは、タナボケしにくい伸縮の少ないものを選びたい。またタナ調整を頻繁に行なうので、トンボやウキ止めゴムを移動させた際に縮れにくいことも重要なポイント。ハリはバラケタイプもしくはダンゴタイプで基本的には上下同サイズとする。

## ■セッティング

竿●8〜21尺

ミチイト●0.8〜1.0号

ウキ●羽根寸10〜16cm

パイプトップ  
またはPCムクトップ



ハリス●

上0.4〜0.5号 30〜50cm

下0.4〜0.5号 35〜60cm

ハリ●上下5〜6号

## ●オモリ 実寸大

8〜9尺●0.25mm厚板オモリ 17mm×31mm

15尺●「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 17mm×24mm

18尺以上●「絡み止めスイッチシンカー」1.6g + 0.25mm厚板オモリ 17mm×31mm

0.25mm厚板オモリ  
17mm×31mm

0.25mm厚板オモリ  
17mm×24mm



「絡み止めスイッチシンカー」

1.2g

1.6g

# “スイミー”の優れた集魚を利用！ 調整簡単な軽めのブレンド

ダンゴの底釣り夏 50cc＋  
ダンゴの底釣り冬 50cc＋  
へらスイミー 50～100cc＋ ※ 50ccでは軟らかめ。  
グルバラ 50cc＋水 100cc 100ccでは硬め。



## ●作り方

4つのエサすべてをボウルに取り、良くかき混ぜてから水 100ccを注ぎ、指を熊手状に開いて 20～30回かき混ぜる。水が行き渡ったら軽くまとめ、ボウルの隅に寄せて吸水を待つ（5分程放置したら硬さが安定する）。

## ●特徴

いずれのエサも底釣り向きのまとまり感と重さを兼ね備えており、ウズリにくく調整も簡単なブレンドパターン。ペレット系のエサに対して反応が弱い傾向の釣り場でも、スイミー系の優れた集魚力でへら鮒を寄せつけ、安定的に食いアタリをだし続ける。

## ●使い方のコツ

標準的なエサ付けサイズは直径 10mm前後。硬めは小さく、軟らかめは大きく付けるのがポイント。打ち始めは「へらスイミー」100ccの硬めでスタートし、ウキの戻りが悪いときやアタリがでにくいとき、またカラツンが目立つときは手水と押し練りで軟らかくするが、軟らかいエサほどエサ付けを丁寧にすることが肝心だ。

# 両ダンゴの底釣り

## ブレンドの考え方

### 基本ブレンド



#### へらスイミー

集魚力の強い養殖飼料スイミーを配合。芯残りしやすく適度な重さがウワズリを防ぎ、底への集魚を高める。ブレンド量を50～100ccの範囲で使い分けることで硬さ調整の役割も担う。



#### ダンゴの底釣り夏

両ダンゴの底釣りの定番エサ。芯残りがよいので食いアタリがやすく、また重さがあるのでウワズリを抑える効果もある。



#### ダンゴの底釣り冬

吸い込みを重視した軽めの底釣りエサ。グルテンを配合していることからエサ持ちも抜群。「ダンゴの底釣り夏」との相性も良い。



#### グルバラ

麩とグルテンを絶妙な比率で配合したダンゴ用エサで「ダンゴの底釣り」シリーズとの相性が抜群。タナで膨らむので、開きによる集魚はこのエサが担う。麩エサの中では重さがあるので、ウワズリの心配も少ない。

### ブレンド調整

基本ブレンドは、重さと開きのバランスをとり、ハリスの倒れ込みの段階からへら鮒を底へ呼び込む軽めのタイプ。より重さを足して、しっかり底で釣り込むときや、ペレットへの反応が強い釣り場では、「グルバラ」に換えて、「ペレ底」をブレンドする。



ダンゴの底釣り夏 50cc + ダンゴの底釣り冬 50cc +  
へらスイミー 50～100cc + ペレ底 50cc + 水 100cc

# 「ヒゲトロ」セット釣り

## 浅ダナ&チョーチン・釣り方の基本とコツ



比較的に食いが良いときは両ダンゴで釣れますが、エサ合わせが予想以上に難しいときや、盛期であっても思いがけない食い渋りに見舞われたとき、さらには釣り場のクセでとろろエサに好反応を示すところにおいては「ヒゲトロ」セット釣りが有効です。季節的には4〜12月まで可能な釣り方ですが、乗っ込みがひと段落する5月から新ペラの放流が始まる10月頃までがベストシーズン

と言えるでしょう。

「ヒゲトロ」セット釣りは浅ダナもチョーチンも、釣りの組み立て方自体に大きな違いはありません。いずれの釣り方も短竿が基本で、釣りやすいのは各釣り場で定められた規定最短尺。長くしても釣れますが、短竿での手返しの早さというメリットが活かせなくなるため、せいぜい10尺までとするのが無難でしょう。加えてヒゲトロセット釣りでは短バリスが基本です。しかも他のセット釣りと異なる点は上下のハリス段差が狭いこと。通常は8cm程度と両ダンゴときほど変わらないセッティングが一般的で、つまりバラケとくわせエサが接近した状態でのセット釣りであ

りすが基本です。しかも他のセット釣りと異なる点は上下のハリス段差が狭いこと。通常は8cm程度と両ダンゴときほど変わらないセッティングが一般的で、つまりバラケとくわせエサが接近した状態でのセット釣りであ

ることが特徴です。釣り方のコツは、まずバラケの役割を明確にすること。「ヒゲトロ」セット釣りのバラケはへら鮎を寄せると共に強い興味を抱かせて引きつけること。つまりへら鮎が距離をとらずに追ってくるバラケのタッチを探ること

が大切です。これがバラケとくわせた距離(段差)やへら鮎との位置関係を常に考えていなければならないウドンセット釣りと決定的に違うところで、ヒゲトロセット釣りではバラケを食うくらいに接近させておき、常にその傍に「ヒゲトロ」を位置さ

### くわせエサ

ハリに引っ掛けるトロ口の量は長さ3〜4cm幅5mm程度。ただし、その量や長さでアタリの出方に変化が起きることがあるので、常に適量を探ることが肝心。また経時変化による繊維の劣化を防ぎ、常に良いコンディションを維持するために1分封を2回に分け、短時間で使い切るのがコツです。



**ヒゲトロ**  
水に浸してハリに引っかけるだけで、強い繊維がしっかりとハリ残りする。分封タイプで少量ずつ使えるので便利。

### エサの大きさ



## セッティングの注意点

浅ダナの釣りなのでミチイトの沈みの良さは必須条件。また小さめのウキの動きを干渉しないよう、さらにはアタリの伝達を考慮して細めのラインを選択する。短バリスが基本なので、アタリがでにくいからといって安易にハリスを伸ばさないこと。バラケのタッチやエサ付け、エサ打ちのテンポなどの調整でアタリを導きだすことを心がける。

### ●オモリ 実寸大

0.25 mm厚板オモリ 17 mm × 15 ~ 25 mm

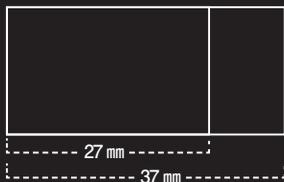


## セッティングの注意点

竿は管理釣り場では規定最短尺を基本とするが、野釣りでは13尺ぐらいまでを想定したい。ラインは比較的良型がそろう釣り方なので強度を最優先に考える。また仕掛け全体が激しく揉まれるため、しなやかなものよりも張りのあるタイプのほうが、アタリが伝わりやすく傷も付きにくい。

### ●オモリ 実寸大

0.25 mm厚板オモリ 17 mm × 27 ~ 37 mm



### ■浅ダナのセッティング

竿●8～10尺  
ミチイト●0.6～0.8号  
ウキ●羽根寸5～7cm  
パイプトップ  
またはPCムクトップ



ハリス●  
上0.4～0.5号5～12cm  
下0.3～0.5号10～20cm  
ハリ●上4～6号、下3～5号

せて吸い込みやすい状態を維持しなければなりません。また、この釣りはへら鮒の

動きが激しい盛期の釣り方なので、想像以上にエサが揉まれて持たなくなること

### ■チョーチンのセッティング

竿●8～10尺  
ミチイト●0.8～1.0号  
ウキ●羽根寸8～10cm  
パイプトップ  
またはPCムクトップ



ハリス●  
上0.5～0.6号5～12cm  
下0.4～0.6号10～20cm  
ハリ●上5～7号、下4～5号

珍しくありません。そのため適度な重さがあるしつかりしたタッチのバラケはもち

ろん、ハリ抜けし難い強い繊維のつるろを使うことが大切です。

# “スイミー”の集魚と重さが効く！ 上から追わせる浅ダナブレンド

## 特S200cc + GTS200cc + 水100cc + スーパーダンゴ100cc



+



+



+



### ●作り方

「特S」と「GTS」をボウルに取り、水を注いだらザツとかき混ぜる。5分程放置したら「スーパーダンゴ」を加え、指を熊手状に開いて練らないようにかき混ぜる。

### ●特徴

「特S」の集魚力と重さでタナを安定させ「GTS」のまとまり感と膨らみでエサの存在をアピール。さらに「スーパーダンゴ」の軽い粒子の開きによってへら鮎の食い気を刺激する。両ダンゴに近いタッチで、上層から追わせながら釣る浅ダナ向きのバラケ。

### ●使い方のコツ

標準的なエサ付けサイズは直径15～20mm。へら鮎の寄りが適量であれば強い圧を加えずにそのまま丸めて使い、寄りが増してナジミ幅が減少したりエサ持ちが悪くアタリがでにくくなった場合は、押し練りを加える回数軽く手もみを加える。カラツンが目立つときは極少量の手水でシットリさせるのが効果的。

# 「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り

## ブレンドの考え方



### 基本ブレンド

#### 特S

スイミーを配合したダンゴエサ。集魚力が抜群なうえ、適度な重さがウワズリを抑えるのでタナを安定させることが可能。寄せること、食わせることが必要な「ヒゲトロ」セットのバラケには最適だ。



#### GTS

エサのまとまりがよく、適度にバラけてへら鮎を寄せるエサ。重くしっかりまとまる「特S」とのブレンドは「2S」と呼ばれる黄金ブレンドだ。



#### スーパーダンゴ

バラケエサとダンゴエサの中間に位置する、基準となるベースエサ。細かく軽い粒子の開きがへら鮎を刺激し、寄せ効果を強調できる。

### ブレンド調整

基本ブレンドは、寄せを意識したものなので、魚の寄りがきつときは、「スーパーダンゴ」を「パウダーベイトヘラ」に換え、よりエサ持ちが良いブレンドに調整する。



+



+



+



特S200cc+GTS200cc+  
水100cc+パウダーベイトヘラ 100cc

### ●エサの大きさ

実寸大



# “プログラム”が割れ落ちを防ぐ！ タナまでしっかり持つブレンド

プログラム400cc + GTS200cc +  
パウダーベイトヘラ 200cc +  
水200cc + バラケマツハ 200cc +  
粒戦細粒 20cc



## ●作り方

「プログラム」、「GTS」、「パウダーベイトヘラ」をボウルに取り、水を注ぎ  
いだらザツとかき混ぜる。5分程放置したら「バラケマツハ」を加えかき混  
ぜ、最後に「粒戦細粒」を振り掛け、練らないようにかき混ぜる。

## ●特徴

すべてに共通するのはまとまり感とボソタッチ。特に軸となる「プログ  
ラム」はその性格がハッキリしており、割れ落ちすることなくタナまでしっ  
かり持ち、タイムリーに膨らみ食い気を刺激する。また最後に加える「粒  
戦細粒」がウズリを抑制しタナを安定させる効果大。

## ●使い方のコツ

標準的なエサ付けサイズは直径20～25mm。深宙ダナに安定的に集魚す  
るため毎投強めの圧をかけて深ナジミを心掛ける。基本的にはネバボソタッ  
チで打ち切るが、カラツが多発したり落ち込みで食ってくるが多い場  
合は、手水でダンゴタッチに調整するとナジミ際の早いアタリで釣るこ  
とが可能。

# 「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り

## ブレンドの考え方

### 基本ブレンド



#### プログラム

普通で作るだけでエサがまとまり、簡単にタナまで持たせられる。まとまりがいいので練らずに使えるので、ボンタッチをキープし、イヤなネバリがないエサ作りが可能。



#### GTS

エサのまとまりがよく、適度にバラケてへら鮎を寄せる。まとまりと開きのバランスに優れたエサ。



#### パウダーベイトヘラ

これひとつで、両ダングにもバラケにも使えるオールランダー。ブレンド全体のみとめ役でもある。



#### バラケマッハ

ウズリにくいバラケエサの傑作。サラッと仕上がり、経時変化によるネバリがでにくいのが特長。



#### 粒戦細粒

粒子が細かいペレットエサで、ブレンド性が高く、アピール力とタナの安定に大きな威力を発揮する。

### ブレンド調整

魚の寄りがきついときや深いタナ(12~13尺)をねらう場合は、よりエサをしっかり持たせるために「GTS」を「天々」に換えて、まとまりと重さを強調する。



プログラム400cc+天々 200cc+  
パウダーベイトヘラ 200cc+水 200cc+  
バラケマッハ 200cc+粒戦細粒 20cc

### ●エサの大きさ

実寸大



# ウドンセットの浅ダナ釣り

## 釣り方の基本とコツ

冬のウドンセット

は、長めのハリスで自然な状態に近づけ、漂う粒子と同調したウドンを吸わせる釣り方ですが、夏場のウドンセットは、バラケに近いづくへら鮎に対して、

できるだけハリスを張らせて釣っていくのが基本です。ですから、くわせのウドンは重めⅡ「魚信」か、それと同等の重さがある「力玉ハード」となります。

そして、セッティングもハリスは短め、ハリは重め（大きめ）となり、ウキ下が直線的になるのが基本です。もし、このウキ下部分が、へら鮎の煽り<sup>あお</sup>などに負けていると、せっかくなにか食ったものが伝わりにくく、結果としてウキにアタリがでなかったり、弱い動きになってしまいます。よくある例としては、ウキ



●イサの大きさ

実寸大

が立つてからの動きがフカフカするだけでアタリに繋がらないパターン。これは、まさしくへら鮎の煽り<sup>あお</sup>に負けている証拠ですから、ハリスを詰める、くわせのハリを重く（大きく）する、くわせそのものを重く（大きく）するなどの対応をしましょう。

また、セッティングだけでなく、バラケエサの使い方も大変重要になってきます。まず、エサをしつかりタナへ入れなければいけませんので、落下中に落とされない程度の硬めが基本です。そして、エサを持たせるには、練っ

### ●くわせエサ

夏のウドンセットでは、重めのくわせエサを使うのが鉄則。そして、へら鮎に煽られてもハリから抜けないことが求められる。なかでも夏期限定発売の「力玉ハード」は、驚くほどのハリ持ちを実現しており、夏のウドンセットには欠かせないアイテムだ。



#### 力玉ハード

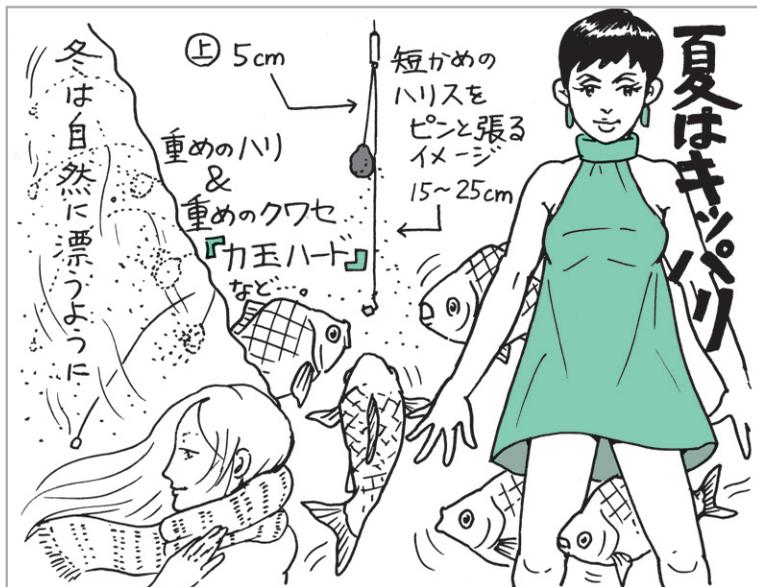
通常の「力玉」よりも比重があり、ハリ持ちに優れている。球状ではなく俵型で、色が黄色く仕上げていることで、水中でのアピールも高い。ハリ持ち抜群なので手返し良く積極的に攻める釣りも可能となる。

て持たせる、重さで持たせる、そして、「粒戦」を利用して開かせて持たせるという考え方があります。いずれにしても、沈没するぐらいの深ナジミにしておき、竿を引っ張ったり、竿先をおおったりして、バラケを促します。

アタリがでるタイミングは、バラケエサが付いているうちです。バラケエサが抜けて

からウドンだけで待つて釣るという釣りではないこと（を覚えておきましょう）。

盛期の釣りですから、ウキは充二分に動きまわります。手を出さないとカラッパやスレも増えてしまいます。夏場はウドンセットでもアタリ返しでも早いですから、何でもかんでも早いアタリに合わせる必要はありません。

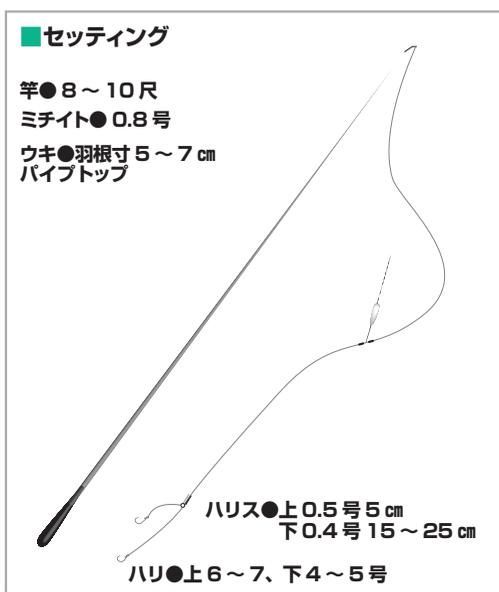
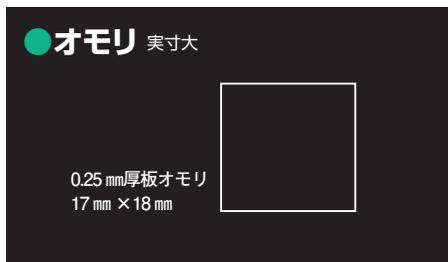


大きいくわせエサに大きいハリゆえ、がちり食えば竿ツンや竿を持って行かれるようなこともあります。そう考えれば、弱い動きを見送

り、ウキが消し込むような鋭く大きな強いアタリだけに絞ってあげれば、カラッンやスレを防ぎ、必然的にヒック率が上がるのです。

## セッティングの注意点

ウキ下をできるだけしっかり張らせることが必要。ストレスなくウキが立つようなオモリ負荷のあるものを選び、煽られてもハリスが張ってくれるような長さ設定とハリスを張らせることができる重さ（大きさ）のあるハリというバランスを重視する。



# 相性優れた“2S”を有効利用！ エサ持ちと開きのバランス抜群

## GTS400cc＋特S200cc＋ セット専用バラケ200cc＋水200cc



### ●作り方

「GTS」と「特S」と「セット専用バラケ」をボウルに取り、水を注いで全体に水が充分行き渡るようによくかき混ぜる。別ボウルに「粒戦」を水に浸したのを作り、それを合体して打ち始める。

### ●特徴

「GTS」の適度なまとまり感、「特S」のまとまりと重さ、「セット専用バラケ」の縦バラケとバランスのとれたブレンドに、開き効果と粒の落下によるアピールが可能な「粒戦」を入れることで、しっかりなじんでエサ持ちし、タナでの膨らみと開きが好時合を長くキープする。

### ●使い方のコツ

寄りがきつくウキの入りが悪くなってきたときは、エサを開かせることでへら鮎をバラケから遠ざけるように「粒戦」を生そのままどんどん追い足して、硬くてゴソツとしたタッチにしていく。逆にエサが開きすぎて持たないときは、「特S」を足して硬さと重さを付けてみる。より重さが必要なら「ダンゴの底釣り夏」を足して調整する。

# ウドンセットの浅ダナ釣り

## ブレンドの考え方

### 基本ブレンド



#### GTS

適度なまとまり感を持ちながらボンタッチをキープ。エサ付けの圧加減に的確にエサ持ちが対応してくれるので、バラケエサのベースに適している。



#### 特S

適度な重さとまとまりでエサ全体をしっかりさせるので、ウワズリを抑え、タナを安定させる。時間経過とともに増すまとまりが、へら鮒が寄ってからエサ持ちをキープする。



#### セット専用バラケ

適度な重さと縦方向のバラケでウワズリにくく、下方向へタナを作る。タナでの抜けもよいので、くわせエサへ降りかかりやすい。

### ブレンド調整

基本ブレンドは、エサ持ちと寄せのバランスに優れた配合だが、パワー系と呼ばれる強烈にへら鮒を寄せて釣る場合は、「セット専用バラケ」を「パワー・X」に換える。ただし、しっかりウキをなじませるために、エサ付けの圧と大きさには細心の注意を払うこと。



+



+



+



**GTS400cc+特S200cc+**  
**パワー・X200cc+水100cc**

### ブレンド&追い足し



#### 粒戦

ペレットによる集魚、バラケエサからこぼれるように開くアピール、麩エサより速い落下によるタナへの呼び込み、ウワズリ防止とその効果は多岐にわたる。

# ウドンセットのチョーチン釣り

## 釣り方の基本とコツ

近年、ウドンセット釣りは、活性の下がる冬場だけでなく、混雑や天候などで食い渋ったときなど、盛期でも活躍する場面が増えていきます。盛期のウドンセットは厳寒期とは違い、比較的短いハリスで釣っていける特徴があります。具体的には、上ハリスが8〜10cmくらいで食わせの下ハリスも20〜30cmほどになります。その理由は、活性の低い厳寒期と違い、活性のある時期なのでバラケエサへの反応が良く、かなりバラケエサへ近づいてくるからです。食わせエサはウドンですが、「ヒゲトロ」セット釣りに近い釣りとも言え、両ダンゴが思わしくない場合のセット釣りは、いまやヒゲでなくウドンという傾向になってきています。

集めるためにも浅いナジミは厳禁で、釣り開始時はウキが沈没するくらい深くナジませます。そして、ウキが沈没したときには穂先を軽く上げて縦誘いを数回行ないます。この誘いでバラケエサの煙幕（粒子の拡散）が縦方向に広がり、その中にある食わせエサを食うという図式となります。ですから、バラケエサの基本は、バラケ性のあるエサをしっかりタナまで持たせること。エサの大きさも比較的大きめとなります。

毎回のようにはウキを沈没させて縦誘いを多用しながら釣っても良いですが、徐々にナジミ幅の調整を入れてトップ先端がでるくらいのナジミにし、それで食いアタリが続くようならば、そのほうが釣りは早くなります。また、強いアタリがでて

いるのに食わないときは、ハリスが長過ぎているので短く調整する場合があります。5cm刻みで短くするか、食わせのウドンを安定させるために「ハリを重く」「ウドンを太く」する方法もあります。

### ●くわせエサ

盛期のへら鮒の煽りに負けないよう、重く、大きく、そしてハリ抜けしにくいというのがポイントです。ネバリが強くハリ抜けしにくい「魚信」やエサ持ち抜群の夏期限定商品「カ玉ハード」がオススメです。



※夏場は1分封に対して水60〜70ccの硬めに作るとよい。



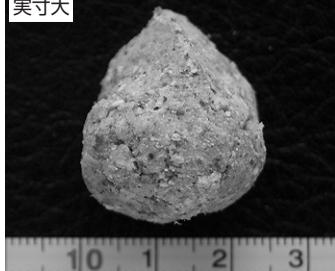
「カ玉ハード」は瓶詰めタイプなので、バッグに忍ばせておくといざというときに役立つ。

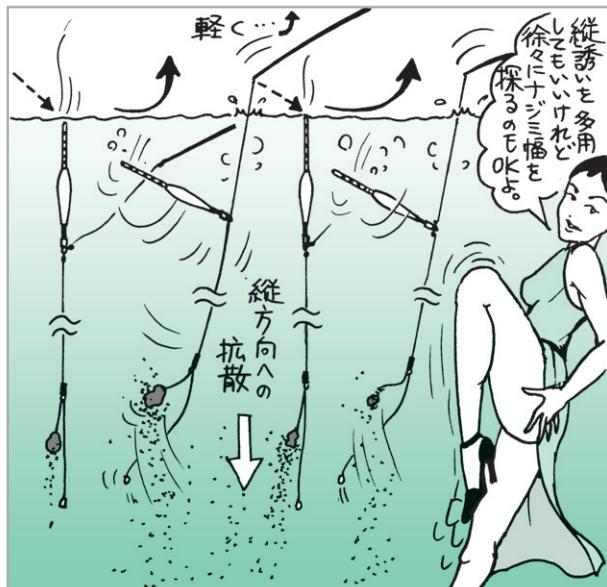


「カ玉ハード」は球形でなく角張らせてあるので、落下中のアピールも高い。

### ●エサの大きさ

実寸大





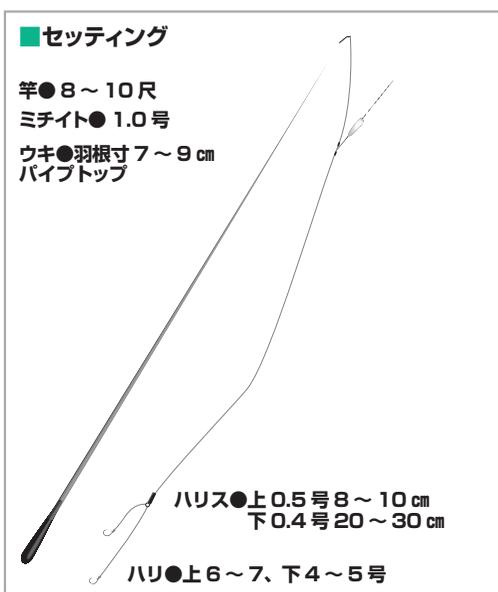
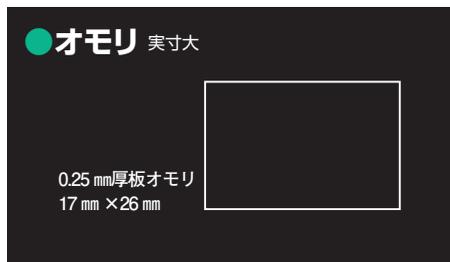
盛期のウドンセットは想像以上に魚がタナに集まりエサが煽られます。食わせエサが付いている下ハリスが張るように意識しましょう。

ウキは浮力のあるものを使用します。それはタナまで一気にエサを入れて、途中のサワリを抑えるためです。

そうしないとウキが立つ前にエサが食われて寝ウキになったりする原因になります。使用するロッド、ねらうタナによっても異なりますが、イメージ的には両ダンゴのチヨーチン釣りで使用するぐらいのものが適しています。

## セッティングの注意点

盛期のウドンセットは、ハリスを張らせることが肝心。バラケエサに反応する時期だけに、食わせの下ハリスはかなり短くなる。また、下ハリスを張らせるためにも、食わせのハリも大きめが良い。また、バラケ性のある大きめのエサを早くタナへ届けるためにも、オモリ負荷の少ないウキはNG。ウキが立たないときは、エサで対処するよりウキの大きさを変えたほうが良い。



# “バラケマッハ”をベースに！ タナで開くボソタッチブレンド

## バラケマッハ 600cc＋ セット専用バラケ400cc＋水200cc



+



+



※別ボウルに「粒戦」100cc＋  
水70ccを用意しておく。

### ●作り方

「バラケマッハ」と「セット専用バラケ」をボウルに取り、水を注いで全体に水が充分行き渡るようによくかき混ぜる。それとは別に「粒戦」を水に浸したものを用意しておく。

### ●特徴

ブレンド全体の特徴はタナで開くことを意識したもの。「バラケマッハ」が魚を寄せるボソタッチのベースでありながら、エサを持たせる役割も担う。「セット専用バラケ」は、縦方向へのバラケを強調してウワズリを防ぐ効果がある。

### ●使い方のコツ

打ち始めは、基エサを25～30mm程度のやや大きめで打ち込んでいく。ウキの入りが悪くなったりしたときは、別ボウルに作った「粒戦」を足し、おかしいと感じればどんどん追い足していく。それでは対応できない場合は、左頁のブレンド調整を行なう。このときも、別ボウルに作った「粒戦」を追い足してエサを調整していく。

# ウドンセットのチョーチン釣り

## ブレンドの考え方

### 基本ブレンド



**バラケマッハ**  
適度な重さがありウワズリにくいうえ、また、タナまで持って開く。ネバリにくいので、ボソタッチをキープする。



**セット専用バラケ**  
適度な重さと開きの早さ、強い集魚力が特長。タナで素早く抜くタイプのバラケエサが作りやすい。



### ブレンド調整①

よりエサを持たせたいときは、「天々」をブレンド

**バラケマッハ 600cc + 天々 400cc + 水 200cc**



+



+



### ブレンド調整②

ウワズリを重さと硬さで抑えるときは、「鬼バラ」と「ペレ道」をブレンド

**バラケマッハ 400cc + 鬼バラ 400cc +  
ペレ道 200cc + 水 200cc**



+



+



+



# ペレットエサの宙釣り

## 釣り方の基本とコツ

ペレットエサをブレンドした両ダンゴの宙釣りを総称して「ペレ宙」と言います。便宜的に長竿で沖打ち(タナ1〜2m、大きなエサと大きなウキで良型ばかりを揃える釣りを「ペレ宙」。通常の浅タナの延長で、軽めのペレットエサを使用し、数と型の両方をねらう「ライトペレ宙」と呼び分けているようにです。

どちらの釣りにも共通して言えることは、集魚力の強いペレットを使うことでより多くの魚を集めて釣つていこうというものですから、エサがへら鮎あおの煽りに負けるようでは釣りになりません。ですからバラけやすいエサは禁物で、エサ持ちが悪いつきはエサを硬くするか、ペレットの量を増やして重さを付けるといったのが基本です。

沖をねらうペレ宙は、細かいセッティングで合わせていくのでなく、強いエサを使うことで食い気のあるへらに競い食いさせる釣りなので、ウキの動きが乏しいときや、釣れてくる型が揃わないときは、竿の長さやタナを変えて対処します。

一方、ライトペレ宙は、両ダンゴの延長と言ったように、テンポ良く打っていくことで数を稼ぎながら、良型も混じるといった釣りです。ですから、小エサの一発取りが基本です。

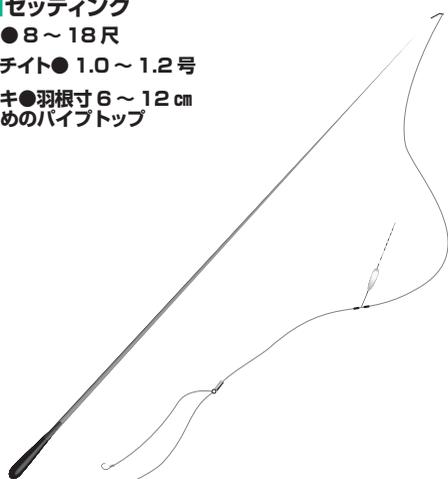
ペレットエサとブレンドするエサは、さなぎ粉の入っていない白い魅エサが適しています。できるだけ、ペレットに反応する良型だけを寄せたいからですが、その白い魅エサを上手く使いこなしてエサ合わせをしましょう(ブレンドの考え参照)。

### セッティングの注意点

軽めのエサを使う短竿の釣りの場合は、通常の両ダンゴの釣りと同じで良いが、沖打ちの場合は、大きなウキでトップも太め、ハリスも長めとなる。

■セッティング

竿●8〜18尺  
ミチイト●1.0〜1.2号  
ウキ●羽根寸6〜12cm  
太めのパイプトップ



ハリス●0.4〜0.6号  
上30〜50cm、下40〜60cm  
ハリ●上下6〜8号

### ●オモリ 実寸大

短竿の場合

0.25mm厚板オモリ  
17mm×20mm

沖打ちの場合

0.25mm厚板オモリ  
17mm×38mm

# “ペレ軽”で作る軽いペレットダンゴ 短竿ライトペレ宙ブレンド

ペレ軽 400cc + 白べら 200cc +  
浅ダナー一本 200cc + 軽麩 200cc +  
水 200cc



## ●作り方

すべての粉をボウルに取り、水を注いだら全体を良くかき混ぜる。エサ全体に水が浸透するまで数分おいてから使い始める。時間が経つと多少エサがしまってくるので、打ち始めからエサをいじりすぎないようにする。

## ●特徴

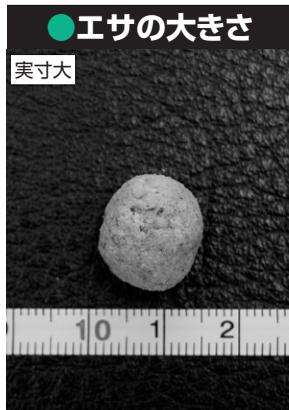
「ペレ軽」はペレットを配合しているが、通常の両ダンゴ感覚で使えるエサ。単品でも充分だが、「白べら」、「浅ダナー一本」、「軽麩」をブレンドすることで、釣っていくなかでの調整がしやすくなる（ブレンドの考え参照）。

## ●使い方のコツ

通常の両ダンゴと同じようにエサの持ち具合を練って調整していくが、食わせようと軟らかくしてエサが負けるようなときは、硬さで持たせるようにしていく。

## ●エサの大きさ

実寸大



# “ペレ道” ベースの王道！ 沖打ちペレ宙ブレンド

ペレ道200cc＋粘カスプーン1杯＋  
水200cc＋もじり200cc＋  
浅ダナー一本 200cc＋軽麩 200cc



## ●作り方

「ペレ道」と「粘カ」をボウルに取り、そこへ水を注いでかき混ぜて数分おく。その後、残りの麩エサを入れて全体がムラにならないようよくかき混ぜる。エサ全体がなじむよう少しおいてから使い始める。

## ●特徴

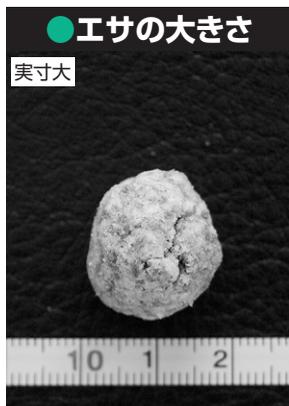
「ペレ道」の重さと集魚力をメインとした重いダンゴエサ。「粘カ」を入れることでさらなるエサ持ちを強調し、盛期の強烈なあおりにエサが耐えられる。

## ●使い方のコツ

ペレットを多く配合したエサは、余計なネバりをださないためにもあまりいじらないで使いたい。そこで、状況への対応は、3種類の白い麩エサを利用する（ブレンドの考え参照）。

## ●エサの大きさ

実寸大



# ペレットエサの宙釣り

## ブレンドの考え方

ペレ道



ペレ軽



ペレットのベース

ペレットだけでなく麩エサへの反応もあるときは「ペレ軽」を使い、あきらかにペレットへの反応が良いときは「ペレ道」をベースにする。また、「ペレ道」に換えて「粒戦細粒」を使うとウキの動きがガラッと変わることもあるので、わからないときは実際に打ってみて反応の良いものを見つける。



粒戦細粒

「ペレ道」ベースでウキの動きが悪いときに変更すると、ウキの動きが明らかに変わることがある。

## ブレンドエサの役割

ブレンドする白い麩エサにはそれぞれの特徴と役割があるので、状況に応じてそれらを出し入れすることでエサの調整を行なう。例えば、開きが欲しいときは「もじり」や「白べら」を多くし、エサ持ちをよくするなら、「浅ダナー一本」や「軽麩」を多くする。

ネバリによるエサ持ち



浅ダナー一本

ソフトなネバリでエサ持ちをアップするほか、タナでの膨らみもある。

開き & 膨らみ



もじり/白べら

どちらもエサをいじってもバラケ性を失わないので、開きを維持する。

つなぎによるエサ持ち



軽麩

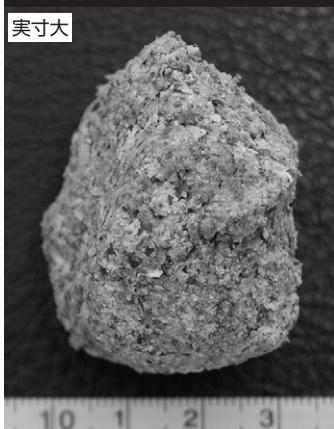
きめ細かい麩がエサ全体をつないでエサ持ちの効果をアップする。

# 「一発」セットのチョーチン釣り

## 釣り方の基本とコツ

### ●エサの大きさ

実寸大



この釣りの基本は、しっかりと付けた大きな硬いボンバラケを大きなウキで一気に入りに入れ、大きな縦誘いを繰り返しながら強烈にバラけた粒子のなかにあるくわせエサの「一発」を吸い込ませる釣りです。

そのため、バラケ性の強い素材のブレンドをベースとするが、タナでバラケさせるためには、ウキが沈没するぐらいの深ナジミが必要で、そのためにエサは大きめで硬めが基本となる。硬さは、粉6…水1の超カタバソナ

5…1のカタバソで、縦誘いを数十回繰り返したとしても、しっかりとハリにエサが付いていることが基本。早いタイミングのアタリで釣れた場合には、バラケエサが付いて帰ってくるおつりバラケが理想とも言えます。

アタリは、ドカンと消し込むようなアタリもありますが、大半は、竿ツンや「一発」を吸い込んで持つていくようなアタリです。小さい動きは見送るか、ききアワセすると良いでしょう。また、ききアワセで手応えがなければ、縦誘いを入れたいと同じと考えると、次のアタリを待たないで良いでしょう。

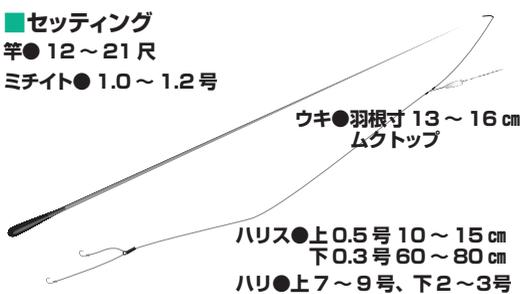
### ●くわせエサ

「一発」には、小・極小・マイクロと3サイズ用意されているので、状況に合わせて使い分けられる。小さいほうが吸い込みがよく、大きいほうがアピールできる。使い方は、一回水に浸したものを指先で押して水を抜いてハリに付けるが、このときに揉みを加えるとハリ抜けしにくくなる。



### ■セッティング

竿●12～21尺  
ミチイト●1.0～1.2号



### ●オモリ 実寸大

絡み止め  
「スイッチシンカー」1.2g +  
0.25mm厚板オモリ  
17mm × 26mm

+

0.25mm厚板オモリ  
17mm × 26mm

# 強烈に寄せながらもエサ持ちする！ 超カタボンバラケ

## 鬼バラ400cc＋段差バラケ400cc＋ 天々400cc＋水200cc



### ●作り方

「鬼バラ」、「段差バラケ」、「天々」をボウルに取り、水を注いで全体に水が充分行き渡るように良くかき混ぜる。基エサはエアーを含んだサラサラの状態にしておき、ボンをキープする。

### ●特徴

バラケ性最強の「鬼バラ」、強烈な縦バラケを演出する「段差バラケ」という非常にバラケ性に優れたエサを、ネバリのある「天々」がまとめてくれるので、タナに入ってから強烈にバラけさせることができる。また、適度なネバリがエサ付けをやすく、割れ落ちも防ぐ。

### ●使い方のコツ

大エサを打つため量を多めに作るので、半分ぐらいに小分けして使う。基エサは必ずエアーを含んだままにしておき、エサ付けのときにギュッとギュッと握り、必ずエサの中心にハリがくるようにする。エサ付けしにくい場合は、エサ揉みの回数を増やし、とにかくハリから抜けないようにしっかり付けるようにすることが肝心だ。

# 軽い仕上がりでタナに漂う！ シットリネバボンバラケ

## 段差バラケ400cc＋浅ダナー一本 400cc＋特S200cc＋水200cc



### ●作り方

「段差バラケ」と「浅ダナー一本」と「特S」をボウルに取り、水を注いで全体に水が充分行き渡るようによくかき混ぜる。素材の特徴による軽いネバリはあるが、ボソを活かすようにする。

### ●特徴

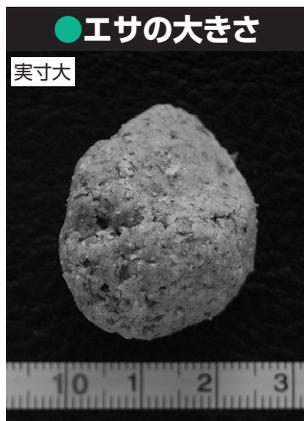
バラケ性が強いのは「段差バラケ」だが、タナで膨らむ「浅ダナー一本」の効果でアピール度は高く、また、どちらの魅も軽めなのでバラけた粒子が長くタナで漂うので渋いときに強い。「特S」をブレンドすることで、エサ持ちを良くしている。

### ●使い方のコツ

超カタボソバラケに比べてエサの大きさは小さくし、落下中のバラケを抑えるように、やや丁寧に付ける。

### ●エサの大きさ

実寸大



# 「一発」セットのチョーチン釣り

## ブレンド調整

### ●超カタボソバラケ

寄せとバラケ性だけを重視する場合は、まとめ役の「天々」を抜き、さらに「段差バラケ」を「新B」に換える。

# 鬼バラ600cc + 新B600cc + 水200cc



### ●シットリネバボソバラケ

寄せとバラケ性を強調する場合は、「新B」を追加し、「BBフラッシュ」でエサ全体をまとめる。

# 段差バラケ400cc + 新B400cc + BBフラッシュ200cc + 水200cc



# 今期は、 ややボソ。



これまでヤワネバタッチが有利とされてきた両ダンゴも、“ややボソタッチ”で大きな釣果につながるケースが増えつつある。それなら出番は「バラケマツハ」。しっかり吸水させた基エサに追い足せば、微粒子によってボソが立ち、“ややボソタッチ”のエサになる。今シーズン、両ダンゴ時合への道を開くには、このタッチがひとつの鍵。

## チョーチン両ダンゴ、一押しブレンド。

■今期オススメの“ややボソタッチ”

「天々」200cc+「グルバラ」200cc+「パウダーベイトヘラ」200cc+水200cc+「バラケマツハ」400cc

■さらに、しっかりエサを持たせたいなら

「天々」200cc+「グルバラ」400cc+「パウダーベイトヘラ」200cc+水200cc+「バラケマツハ」200cc

●バラケマツハ 700g スライダーチャック袋 ●バラケマツハミニ 320g チャック袋

**丸マルキュー株式会社**

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL\_048-728-0909

ホームページアドレス <http://www.marukyu.com/>

マルキューへら鮎メールマガジンも、お申込はこちらから。 <http://www.marukyu.com/herabunatengoku/>

釣れるヒント満載!!  
**へら鮎天国**

